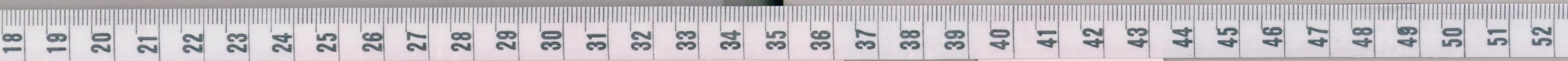
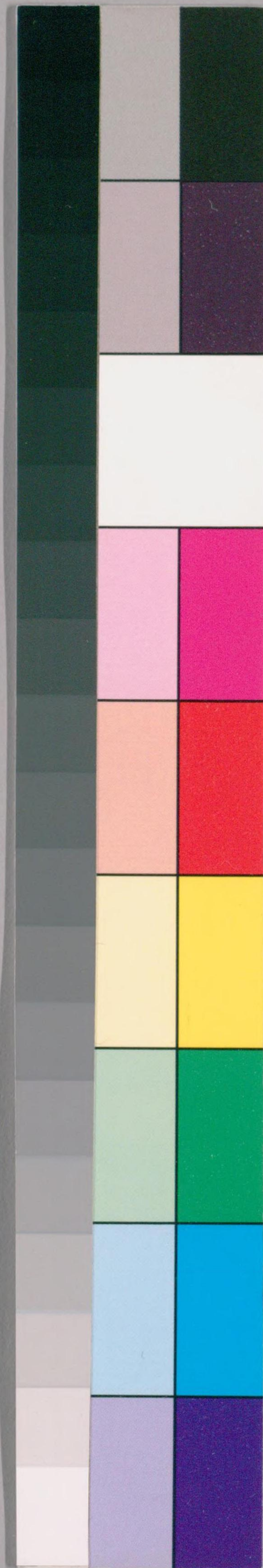


136  
50  
197

官刻  
孝義錄

若狹

二六



国立国会図書館 タイトル『孝義録』 請求記号 136-197

ガラス使用

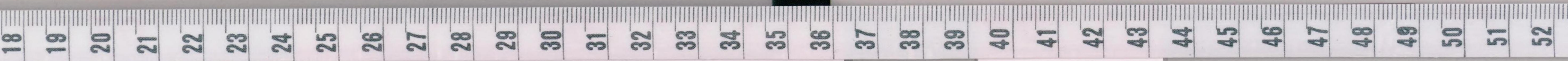


官刻  
孝義錄  
若狹

廿六

136  
50  
197

東 京 圖 書 館  
和 書 門  
傳 記 類  
函 架 號 冊  
~~一三五~~  
~~二七八~~  
五〇





由

孝義錄卷之二十六

明治九年文部省交付

孝行者

酒井修理重領分  
遠安中郡奥田郷村

百姓糸重妻

すし

四十二歳

正徳六年  
喪失

若狭國

奇特者

日領  
二芳那早津浦

庄倉

二宅孝左馬

六十三歳

享保十三年  
喪失

奇特者

日領  
日所

義全母

二宅孝左馬

二十八歳

享保十八年  
喪失

忠義者

日領  
小浜城下後倉町

町人佐波倉

孝九郎

六十八歳

享保十八年  
喪失

孝行者

日領  
遠安上中郡上庄郷村

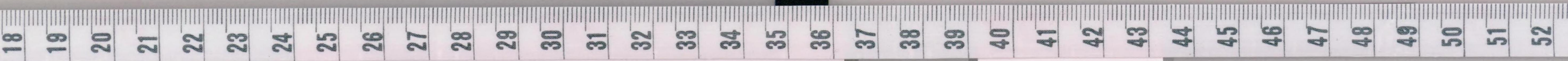
百姓

富五郎

歳不知

享保十八年  
喪失

孝義錄卷之二十六





孝行者

日領 遠安中於有田村

百姓 沼田

歲不知

寛保十八年

潔白者

日領 家末

番所下番仲間

五十九歳

寛保元年

奇特者

日領 大飯郡林世村

庄屋

七十一歳

寛保二年

奇特者

日領 大飯郡日引村

百姓

三十一歳

延享元年

忠義者

日領 小浜城下八百屋町

町人様屋敷下男

三十歳

延享二年

農業出精

日領 遠安中於新滝谷村

百姓 長林

三十一歳

延享三年

孝行者

日領 小浜城下大津町

百姓

五十五歳

寛延元年

孝行者

日領 大飯郡尾内村

五十八歳

寶曆五年

孝行者

日領 遠安中於尾内村

百姓

池田安子

六十九歳

寶曆五年

奇特者

日領 大飯郡相田村

半十郎

六十五歳

明和元年

奇特者

日領 日所

百姓 金田

七十四歳

日時

奇特者

日領 日所

百姓

十四歳

日時

孝行者

日領 遠安中於納田終村

百姓 佐倉

三十一歳

明和六年

孝行者

日領 大飯郡早瀬浦

百姓 佐倉

四十六歳

明和七年

孝行者

日領 遠安中於坂屋村

庄屋

六十八歳

明和八年

奇特者

日領 大飯郡音海村

五十五歳

明和八年



○忠義者 日頃 家来

○兄弟睦者 日頃 大坂郡小湊村

○兄弟睦者 日頃 日所

○孝行者 日頃 三方郡高濱村

○孝行者 日頃 遠安上中郡熊門村

○孝行者 日頃 大坂郡高濱合志郡町

○孝行者 日頃 日所

○孝行者 日頃 大坂郡高濱合志郡町

孝行者 日頃 小湊城下村羽小路

奇特者 日頃 大坂郡高濱合志郡町

潔白者 日頃 小湊城下今町

奇特者 日頃 三方郡行波村

○孝行者 日頃 三方郡高濱村

孝行者 日頃 三方郡高濱村

孝行者 日頃 三方郡高濱村

孝行者 日頃 三方郡高濱村

代官長尾村見義妻下女

刀女 死後 昭和八年 褒美

宋四郎 二十七歳 昭和八年 褒美

磯八 二十歳 日時 褒美

史門 四十歳 安永元年 褒美

八之橋 三十二歳 安永元年 褒美

幼之橋 四十五歳 安永二年 褒美

浦七 甲三歳 日時 褒美

七之九 三六歳 安永二年 褒美

源七 甲一歳 安永二年 褒美

若量 六十二歳 安永二年 褒美

之人 六十七歳 安永三年 褒美

新太郎 五十二歳 安永三年 褒美

亦兵衛 甲八歳 安永五年 褒美

長三郎 五十五歳 安永五年 褒美

八之橋 六十六歳 安永五年 褒美

安右馬 甲十五歳 安永五年 褒美





孝行者 日頃 二方郡多漢村

百姓百手娘

たふ 四十歳 安永五年 褒賞

孝行者 日頃 二方郡多漢村

百姓

借四郎 二十三歳 安永五年 褒賞

孝行者 日頃 二方郡多漢村

百姓

若菜 十七歳 安永五年 褒賞

孝行者 日頃 二方郡多漢村

百姓

李吉清 二十七歳 安永五年 褒賞

孝行者 日頃 二方郡多漢村

百姓

卯右衛門 二十七歳 安永五年 褒賞

孝行者 日頃 遠安上中郡不保村

百姓

宮本 三十四歳 安永五年 褒賞

孝行者 日頃 遠安上中郡中世木村

百姓 二方郡多漢村

志げ 二十九歳 同時 褒賞

孝行者 日頃 遠安上中郡中世木村

百姓 二方郡多漢村

のぶ 歳不知 安永七年 褒賞

孝行者 日頃 遠安上中郡黒田村

百姓 二方郡多漢村

さん 三十一歳 安永九年 褒賞

兄弟睦者 日頃 遠安上中郡三生井村

百姓

八右衛門 五十五歳 安永九年 褒賞

風俗宜者 日頃 遠安上中郡兼田村

百姓 町人相茶屋長尾娘

惣百姓 安永九年 褒賞

孝行者 日頃 大飯郡多漢谷家地横町

百姓 町人相茶屋長尾娘

心さ 四十四歳 安永九年 褒賞

孝行者 日頃 小漢城下富沢町

百姓 町人相茶屋長尾娘

志ゆん 三十八歳 安永九年 褒賞

孝行者 日頃 遠安上中郡有田村

百姓 町人相茶屋長尾娘

すん 五十二歳 天明元年 褒賞

孝行者 日頃 遠安下中郡井上村

百姓 町人相茶屋長尾娘

法史 六十歳 天明元年 褒賞

潔白者 日頃 遠安上中郡慈門村

百姓

金助 六十三歳 天明元年 褒賞

孝義録 卷三十一

四





○潔白者 日所頌

遠安下中郡園分村

百姓

全助妻

牛之 日時 癸亥

○奇特者 日所頌

大飯郡高浪赤尾村

百姓

町人小宮物屋

孫之市 天明元年 癸亥

○孝行者 日所頌

三芳郡新庄村尾

百姓

次市助 天明四年 癸亥

○奇特者 日所頌

大飯郡日引村

百姓

町人昇屋茂左馬兼

市之 天明四年 癸亥

○忠義者 日所頌

大飯郡藤島村

百姓

日下女

九之 日時 癸亥

○奇特者 日所頌

遠安上中郡中保村

百姓

新屋 天明六年 癸亥

○孝行者 日所頌

大飯郡園分村

百姓

長次郎 寛政元年 癸亥

○奇特者 日所頌

大飯郡高浪赤尾村

百姓

伊波任右衛門 寛政元年 癸亥

下平 寛政元年 癸亥





奇特者 日頃

百平素

とく

日時 褒員

奇特者 日頃

日時

岩

日時 褒員

孝行者 日頃  
遠安下中郡西谷村

百姓

花八

寛政元年 褒員

孝行者 日頃  
大坂郡高津町

百姓

五席助

寛政元年 褒員

孝行者 日頃  
酒巻修理定領分  
小浜城下権師町

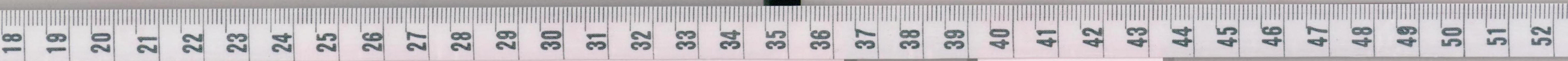
三松煙

久次郎

寶曆十一年 褒員

奇特者之序云

之序云遠安大飯郡日引村の百姓より十八石九斗の  
あり此高と云らんとなり篤実小松母殿の  
のありと云あり一節なる内乃浦の二組と云  
らるる郷ありしふそ然中奥七村よと云  
る人くハ之序云遠安と云く吏と云く云ん  
しとも云りたはハ多きことハ在の産業の  
事を頼とつるにふらは福んらるに云く  
里又寛保の以緒麻村の邦にめれてお敷とく  
いふとハ其乃孝行の美中と云く云んて村の





困若くはしむるに似たりしに、  
 あり金どりあり者、債とぬのさなからば、  
 その利是とたよむくらする事、年久しに、  
 之部と婦、折云を、  
 したる村人の家産、  
 され、親族らありて、  
 人く、此借銀債、  
 くらば、  
 事ありといふ、  
 我兄を、  
 村人の、  
 利是と、  
 後つ、  
 身と、  
 後と、  
 子意、  
 しく、  
 領、  
 の、

我兄を、  
 村人の、  
 利是と、  
 後つ、  
 身と、  
 後と、  
 子意、  
 しく、  
 領、  
 の、





の志成つてついに奥七の村乃美にこのと助け  
天明四年の凶作に村人の艱難多うり  
うりて穢饑ありてあまもく強へをける粟糠を  
と殺す儀とて村のうらひをいひて組  
のうらひをいひてあまもく強へをける粟糠を  
と殺す儀とて村のうらひをいひて組  
のうらひをいひてあまもく強へをける粟糠を  
と殺す儀とて村のうらひをいひて組

孝行者池田安を史

池田安を史の孝を史中尾崎村の百姓あるを  
史して先祖より留氏を名のり父乃義右衛門と記  
中尾崎の田畑の高之十二石ありて  
しうたかりて今も一石ありぬをかり  
これの尾崎川にありて船ととり市  
にうらひをいひてあまもく強へをける粟糠を  
と殺す儀とて村のうらひをいひて組  
のうらひをいひてあまもく強へをける粟糠を  
と殺す儀とて村のうらひをいひて組  
のうらひをいひてあまもく強へをける粟糠を  
と殺す儀とて村のうらひをいひて組







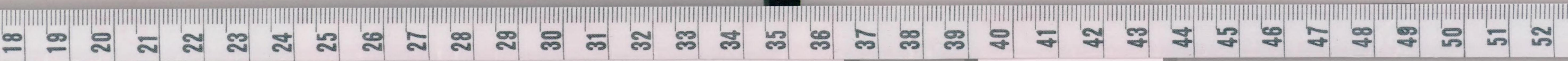


奇特者年十郎

奇特者七玄清

奇特者傳者

年十郎七玄清傳者ハ三方郡相田村のまゝのなりけり  
 乃村乃うられはる人十歳ありありあつた四人あ  
 つた業ありとてあつたりれはよ新きりよとて  
 らはも復来りて四人の内なる十二よふの事なる松  
 とていふものよつとてぬきりけりなとていふものとも  
 るれハ助くといふかもあること年十郎ハ母あり  
 子撫りててあつたりてかばとていふことありとて  
 をせつけく種を採ひ拂ふは種松とてあつたり  
 て年十郎ハ晩よそとていふこと年十郎持く種  
 よく種拂ひこれハ種若れこれに選とけりて  
 十郎ハふれ七玄清といふものを見て又種ありて  
 の腕に噛付きりり折ぬき持くるものことあり  
 ありとて右乃きりり種とていふことありとてあつたり  
 たけりてあつたりとていふこと年十郎も勇氣あ  
 るものよとていふことありとてあつたりとてあつたり  
 手とてあつたりとていふこと年十郎もいふことあり  
 とてあつたりとていふこと年十郎の事年十郎の謙





とせしむる後とせしり殺しつげ時金四席り子乃  
傳者いあしき業も十四とせしりなるりしとくか家  
来り深きもて後のはとせしり力を合せしと働さ  
るりの業やせられらるる力をもて松り必死をせぬる  
のそとせしりそのあしきりに死つけられしもの  
あしきりしとせしり平十席ハ業も六十にあしきり  
あしきりしとせしり後をいしりしとせしり業とく  
しとせしり初しとせしり死を救ひ七五席ハとせしり  
後業の業れとせしり後とせしり業とせしり傳者いあし  
おしきりしとせしり業とせしりけしりけるが働さしとせしり

事とせしりしとせしり特たりしとせしり明和元年二月領主  
より平十席七五席に業とせしり傳者いハ後と  
せしりしとせしり業とせしり

孝行者いと

之方那早瀬浦の氏佐左馬り業れいとハ舅姑あり  
くてもあめやうたりし佐左馬り業極めく多くとせしり  
伝口に初て業とせしり殺日業にとせしりしとせしりハ  
りとも又近しとせしりしとせしり業とせしり舅姑と業  
りしとせしり姑ハ先よとせしり今ハ舅の齡八十にあ  
ありて業とせしり業とせしり業とせしりいとせしり









之のいよりのるりとりていふららるる男に是  
 せりめらるるに細しく進むる時隣るる家乃  
 茶櫃と志つらふらるる四人をめり此里居し  
 小佐左衛門家のいよの事とつれ書免をたつてとる  
 里をけりおいらぬと出ると記しゆくお尋のこ  
 免と為して飛らるるぬ是全く孝威のいよの  
 不きらんらん人くいらひあへりけり六領まのり  
 明和七年の五月懐美として兼とあへりて  
 終らるる家の貢ともゆらせりとあへり

忠義者傳

つまのきあふ中羽西津の小松系に是めらるる漢人角原  
 う娘あり家格めくまひしけり六領まは是輕松え  
 歳をまらもとくまふにいよのされらるるあへりて  
 みるらりむれつらにまれおさかみ成りてとて  
 ろりけりいよに接ひありとぬ或時いつものいよに  
 初子とせおひまらるるほらるる小道にいよ接ひ  
 ろるらりよあへりらり痛大池ありて飛つて  
 とつらるるも道進めりていよ初子と地よあへり  
 せ己いよれりよいよつらにありて身とまらるる  
 ろり防らるる痛大やうく嘯付て祇もあへり

孝義録卷二十六

十一



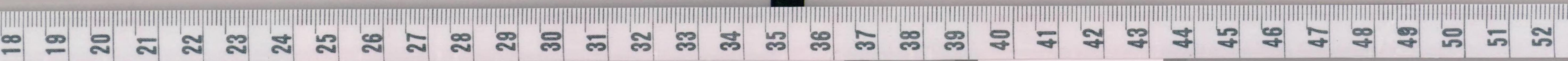


一に及び夜彼を血流せしむ初子ともあけ  
 にありぬされとも程勅のにありきる種よを記  
 あらりれ人くこのさぬをんくもせ集り忽  
 よそ夫をお救へつまを助けくまれ家に久ら  
 しむさくつるまの死せん事いさうよおも  
 たらとけ初子の命つらうくたさうりておとほこ  
 そりれくまれといひくろ日と強まると毒  
 氣あしつらくつらくとまらと養をまを深く  
 憐れ心の限り醫療をつらくまれとそのい  
 るくつるまのうせぬまらつる病おひくろ時

父の漢して家にあらは母無うとて少く養をま  
 り家にいそいであひ養つらうの事やいさうと  
 て初子のまもつらうと尋ねられ人  
 こまらつらう母といひてもけよわらぬん  
 と入るりとも感しと願まを無事とてつら  
 あられる事にも思ひ父の角左忠の跡をあら  
 へ又願まれ家の人とお謀りて西津村なる西徳寺  
 といふらにつるる石碑をたてぬくと明和八年の  
 五月よのめりて願ま又ま忠誠を賞へ代へ  
 角左忠の家に貢とあらうつらう墓と西徳寺の

孝義録卷三十一

十三





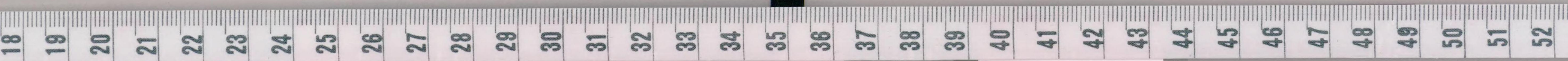
つ外に改めさせその地をとりて寺に佛の像  
をせしむるに水く墓塔のしるしをせしむる事と命せ  
しとそ

兄弟睦者宋四郎

兄弟睦者後八

大坂近小坂村の百姓幸左衛門といふ方の奉若とい  
ふある夕ぐれよ女婦さう一人のよのこ子を抱え  
て来り我等の西國と十三石の親世者へあつら  
ふのありの目もくれしやといふにやいふに  
と我乃高州といふ人といひなれは幸左衛門あてれを

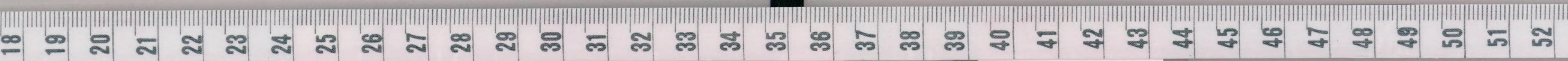
我家にさうありぬとあるとせき方にして人の女にや  
うにさうの諸國と巡礼とを預ひるれらもたあ  
らうとてさうの女の母乃孫おとすもあつら  
しといふあつらひ縁路のうにともあつらひ  
いふ程もあつらひつらひ程くいふ子もあつら  
しともあつらひの高大の世とある人しとあつら  
つとあつらひの幸左衛門といふにやいふに  
よのこ子抱えしやいふに今世  
とあつらひの事とあつらひの事にあつらひの事  
とあつらひの事とあつらひの事とあつらひの事





あけの日始つりれ女いらあゆりてりてり  
 ぬその後支婦とつらもにいつてりてり  
 事うぬら子にこらあら名をい宗四郎といひ  
 て成長に及縁積とつてりてり父母に孝んを  
 つてりてり宗四郎と喜ひてりてり後七  
 年と経て実子の後八をあらけぬ後八も生れつこ  
 孝悌のまのかりとてりてり里の人てり後八生れぬ  
 ろこい宗四郎身たの事とあつてりてりあつてり  
 へりてり後八と二十歳の迄ありとてりてり  
 願まれ家士縁遠を事といつてりてり下泊となり

まら父とやうてりてり後八とてりてり  
 宗四郎にあらつてりてりてりてりてり  
 我身はとてりてりてりてりてりてり  
 年とつてりてりてりてりてりてり  
 斤とつてりてりてりてりてりてり  
 あれよ家とつてりてりてりてりてり  
 あらつてりてりてりてりてりてり  
 兄とつてりてりてりてりてりてり  
 弟の事とつてりてりてりてりてり







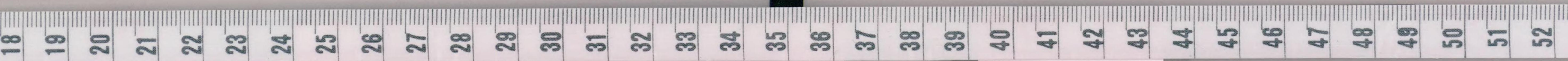


さふふふれい家のうらに歩交りて終日ゆりぬ  
 しこれとありつるよひり戒る事ありされい  
 ある人その子細とさひきつるの孫いふく祖父  
 母れきしあふまのるれいそれと怒り言りて  
 姑のらにうららん事我がまにあらはれりて  
 ひ事とゆららん時いぬへるくゆら戒めぬとそ  
 いんららゆらいつに家のまつてさふふと胃姑  
 よこせはしそれ志と養ひけり姑は十年うり  
 さふふ小浮腫とやとせしに言者病残るか  
 あらう二役とさふらぬらう助けく人の手

お母は夜も食も汚らひらと余初目と志の  
 ひとをそらゆらういけりもいふ色あらうら  
 胃はうらうら齡八十にありりり奉養とらり  
 戸もゆら人の下初とありてありらふあ  
 してららうらもしたる事とさひ出日くあり  
 さぬの昔後りたりりそれいぬれ月のものさ  
 さいあたしとゆらりゆらりいぬら氣もさ  
 ころり事とらりらとありりらひしてらら  
 ぶらうらとゆらもらりありりらと  
 んのあつらゆら福は我をれはるるものも胃に

孝義録卷三

廿七

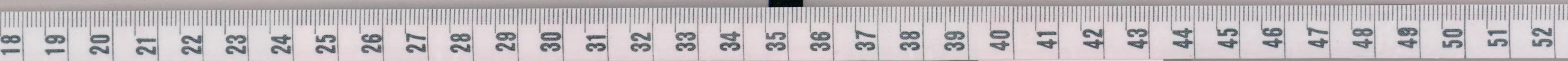








是より又父の世のありし時そのまじ形を乞ひ  
 紙の字一表具せりしをよみて後父の形あり  
 とく永く持佛堂にけりし事として物々を奉礼し  
 中のありしものごとくしむをそあけける事あり  
 漢のありしものも此らに奉けりし事ありし  
 野棠菓子やうのものありしつらなるものありし  
 といひける事ありし事ありし事ありし  
 村の内れ奉んる人ごとく奉りし事ありし  
 るありし程も初末忘る事ありし事ありし  
 世又同じ村ありし桶屋の傳四郎といふもの一人の継  
 母に不孝なる事ありし事ありし事ありし  
 人の世のありし事ありし事ありし事ありし  
 といふ事ありし事ありし事ありし事ありし  
 今れは言母涙の恨の謝礼の事ありし事ありし  
 たら飯桶と稱する事ありし事ありし事ありし  
 こと志と賞し安永六年正月小舎をあらし事ありし  
 一後も永く懐かしく村ありし事ありし事ありし  
 以後の教の事ありし事ありし事ありし事ありし  
 事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし  
 ことありし事ありし事ありし事ありし事ありし



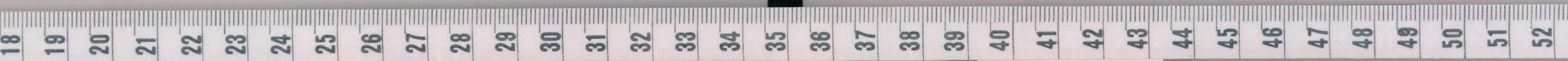


のいふよとくもいふよけふ交とらふふ兄の事  
憐れむハ兄と敬ひく友毫の道とらふま  
たぐひ兄弟に生れん事とらふとく又親縁に  
睦み永く疎きよとらふとく次子らりの中初め  
とくとも老よの情とけし必道とらふ事とらふは  
ふつとらふ彼もとら親あり親の子と毫とら事  
いつ事もいふとらありとらとらとらとらとら  
此書痛みの如くありとらとらとらとらとらとら  
洋の解とけし事れとらの大略ハくとらありとら  
彼らふともいふとらとらとらとらとらとらとら

よして父の志とつとらとらとらとらとらとらとら  
し事とら

孝初者之原在也

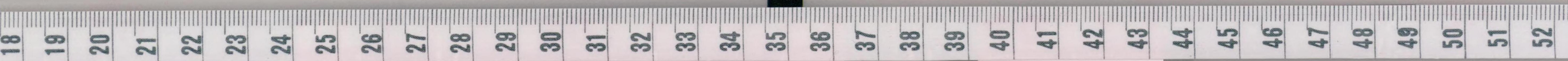
孝初者之原在也保村の百姓之原在也ハ生れつと篤  
実よしてとらとら父母につとらとらとらとらとら  
て彼ら初めとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
母れ世の業乃とらとらとらとらとらとらとらとらとら  
嘗とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
と安否とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
く事とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら





女六歳をくゆへしといひ父ハ之を養ふせしめり  
 といひこれハ親乃んやらん事とされしつら  
 携へゆけりやのこ痔疾をるをせけりを父母保く  
 欲けハとて少キを及治療をせしつらに快  
 さらゆもとるも父の小治しゆけりなると  
 といひぬもハ痛めり時もつらに快しとて  
 ころそめゆもそのふよとむらりも妻もこのこ  
 とくまお従ひ舅姑よめめやうこれハ姑人とおり  
 といふらこころ先悦の念治るかと稱せしり或日  
 あらこあり福半を若くおりけりといふ  
 されハこの人種とて是をさすよ悦まら福半  
 振つけらとらゆひこれとてとて福半を  
 といひとて若せぬられけ新しとて福半ハあら  
 といひ悦の志をうらこふありと若くその父の勝右  
 弟も福半ゆへてとてけ村の祖伝を勤先  
 ぬきつらよつ村ゆく治りてその云系に服せつら者  
 ハるりこころこれハ教十年に及る近家の内膳  
 ありこれハ安永六年十二月領主より三府を奉りて獲  
 たりて若くといふとて

兄弟睦者八右衛門





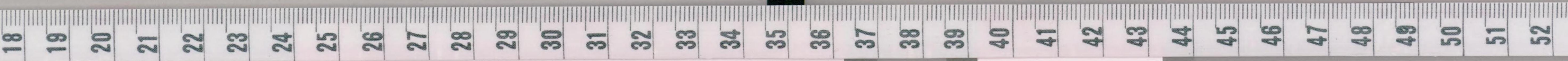




兄の志らしくいふ事ごとくぬらなをまゝくつるよ  
 事ごとくそ従ひたる也いづく後も耕作の暇もえ  
 所産をとりてと價とも我身におくもくも人  
 と監兄の許りの強りそれいふ事まを助け正地  
 とく多く此家候を肩之家産とくもわくは  
 とりともいふおあやうなる初ひ一口の外あくも  
 祿くきれハ願まより獲まはれ米とあくも  
 安永九年四月八日奉りて

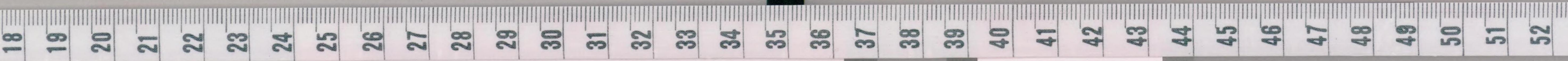
潔白者金助

金助ハ幸甚と申那慈川村乃百姓なり天明元年の  
 春のころ天和のまのとき六人つづつる巡礼に金助  
 の家小ありて云々之の旨をいふ中て我もあ  
 けらるいとも申して出初ぬ我あけもるれく  
 金助の妻やらの流しよまのさく申とくあ  
 らそのわらりあくはける本儀のさくつるれ  
 ことしんるよ金いあこ二米乃銀二又言わらり  
 金いあくあくといふまの流くありたるを  
 ひらりて夫にいせけつるは是をいふあくけ  
 出立し旅人の為せるさるん路のわらりや  
 里ぬ入られとらるも追つてあくくつる





多しの妻もさし世あつたなりしをれをささねたり  
 の人産むよりなりしとせおねねしをさす人  
 痛にやあつたこれの又産む人せやとらんに産む  
 しにさうよてもさうあつたあつたあつたあつた  
 らせんかま甲斐たのしきあつたあつたあつたあつた  
 とさういふあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 さいとけつお近江必たつたあつたあつたあつたあつた  
 玉つさうの金助さうし今ねまの落されつる人  
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 途子携へし金落しつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 さく合さうめく驚さうしとりか金の殺さう人の撲撲  
 なるといふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 とねねさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 もねの糸に脱ひ酒の料めあつたあつたあつたあつたあつた  
 しとさういふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 へたさういふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 ね又まねらもよの憐と深く篤実さうさうものさう  
 しとさういふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 ろうあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 さいとさういふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた





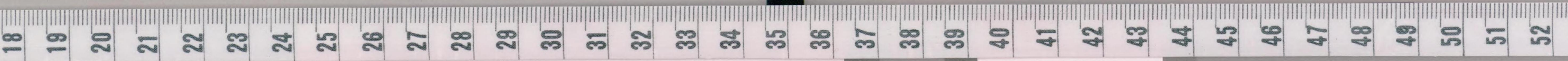








毛のものも志と感しところも百九軒ふちちあつて  
 中へこそ奉の三月小粥を煮て多くれぬ人よあ  
 たへ又冬にも願まうり金りりて奉らす儀をうら  
 求め價を高く延賣とりたせしめらや十二月の  
 價次第に高くして業高ふものもさうにうら  
 ころもさうに高くして業高ふものもさうにうら  
 海ころも我家より二百俵ありれ奉と百俵さうり  
 のまた是れはあまの今さうのいやしと價さうりぬ  
 へしこれとあふ人の多く買來ん時つさうり  
 してさうりつあり心下の損もさうりゆふりり  
 賣あつてさうりさうりて又さうりさうり十二月復  
 して店右為の生澄電地の課收をゆらし且是さう  
 して奉答に出してさうりとも命さうりの目さうり奉  
 のころ又その必儀儲して奉の價高く因窮の人  
 あまのさうりしてさうり店右為金すあを奉祈の許さ  
 持祈り給合施したくさうりさうりあつてさうり  
 るの障り奉もさあらまのさうりこれに我女の昔さう  
 持傳へさうり非奉れ用途にさせさうり業にあつて  
 さうりさうりせぬされぬ時と奉に人くを救はま  
 りさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり









せめて父のなきをいにとけんとあひし中み奉  
このこは母指中のこを弟の事の中にもうらわ  
ては絶くとのこをうらわし通る後の内なる事  
とていへばいへばいへばいへばいへばいへば  
け念れよりけり故にぬえとていへばいへば

貞節者志け

忠義者たま

孝義下中那西は長町よとめら田井を義左衛門つ  
にふるりいへばいへばいへばいへばいへば  
とらうら短刀をいへばいへばいへばいへば

主事の志け賢さうとせつけく短刀をいへば  
とらうら短刀をいへばいへばいへばいへば  
んとていへばいへばいへばいへばいへば  
に義左衛門の志けいへばいへばいへばいへば  
つけいへばいへばいへばいへばいへばいへば  
とらうら短刀をいへばいへばいへばいへば  
とたていへばいへばいへばいへばいへば  
とていへばいへばいへばいへばいへば  
とて親族の志けいへばいへばいへばいへば  
る子のあはれいへばいへばいへばいへば

孝義録

三六





浦屋竹某とてつらものいきてにけあつたよ戸うち  
 たつていさゝかのあもあらしく助けられよとよ  
 にまらしてこれいもあけよとあされとよのら  
 あらあらとあやとて尋らひ警とてとよ人は  
 しらせとて幾方あやとてりしつめ又醫者をとよひて  
 見えしに如の月よりら涙をあひし事はその警  
 せん事とてをこれ清とて疾をりあこととてしこ  
 らんじにそれいふととあせしものいさひよ  
 そととよの燈火よとていさゝらふよとよ海をいさ  
 えししとこれとらひつ子にあら福んもとていさひ  
 とていさひのまはの口のまはのまはのまはのまはの  
 くまはのまはのまはのまはのまはのまはのまはの  
 志つたつらあひしつらとていさゝらふよとよ海をいさ  
 お金とあひしつらとていさゝらふよとよ海をいさ  
 とていさひのまはのまはのまはのまはのまはのまはの  
 貴しとて後とていさゝらふよとよ海をいさ  
 六年六月の事いあん

小倉

...



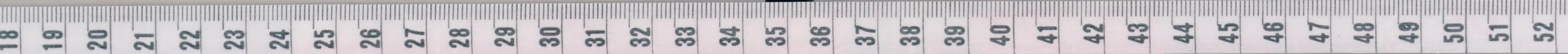


孝義録卷之二十六

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and the style of the calligraphy.

孝義録卷之二十六

十一





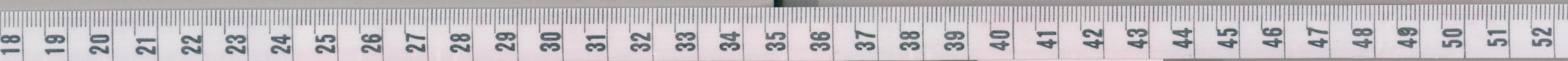
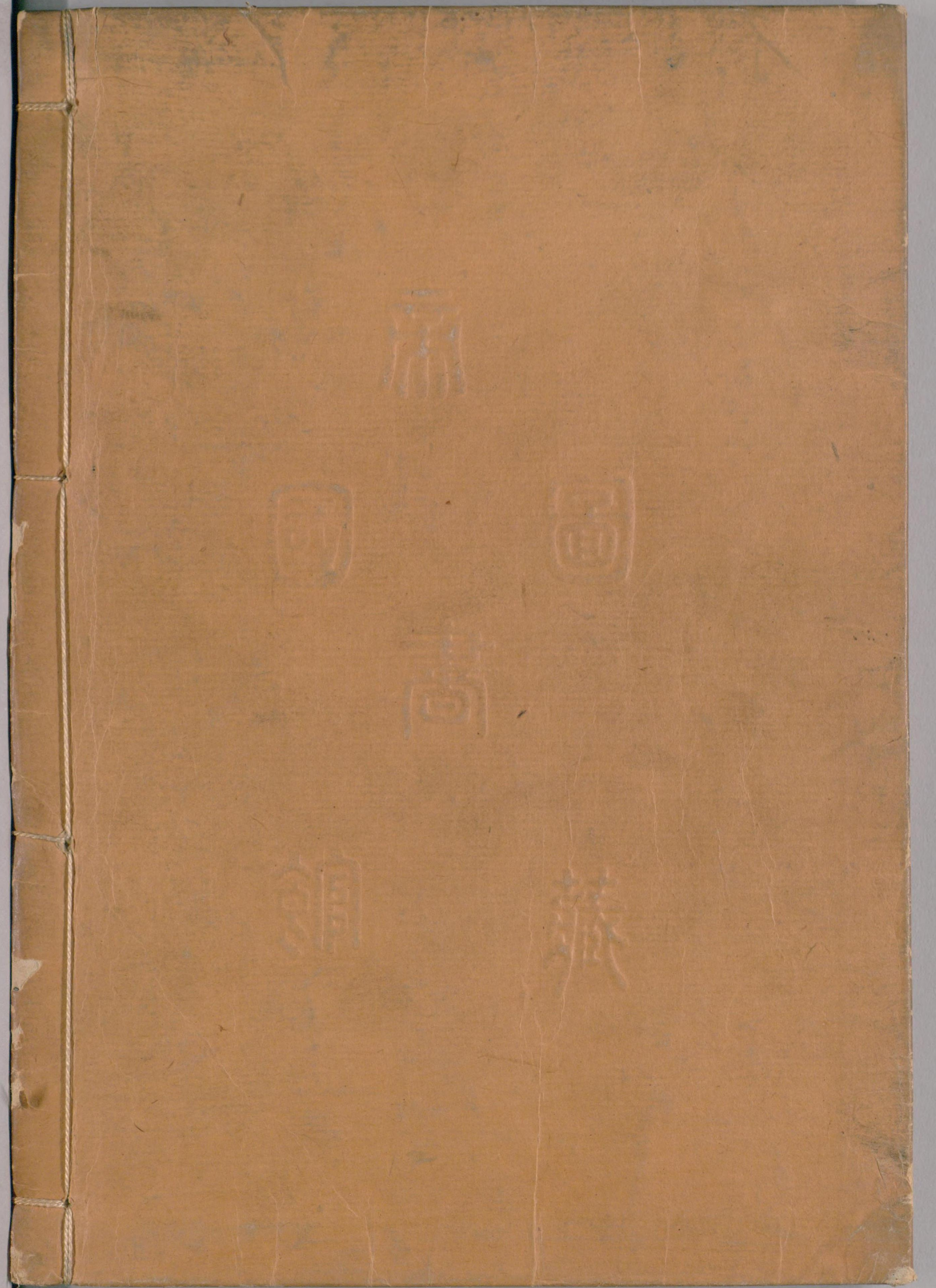
136  
59  
197



国立国会図書館 タイトル『孝義録』 請求記号 136-197

ガラス使用





国立国会図書館 タイトル『孝義録』 請求記号 136-197

ガラス使用